

平成30年度 学校保健統計健康状態調査

調査結果の概要

- ・ 中学1年生（12歳）のDMF T指数（一人当たりの永久歯のむし歯等数）は0.43本で、前年の0.50本からさらに減少し、全国平均の0.74本を本年度も下回る好結果である。
- ・ 歯肉の状態においては、小学校で全国平均を下回る好結果であり、年次推移においても、小学校と高等学校は平成23年度から最も優れた結果である。
- ・ 食物アレルギーを有する者の割合は、全校種において昨年度から増加している。
- ・ 痩身傾向の出現率は、男子は12～14歳で全国を上回り、女子は11歳、13歳、14歳で全国平均を上回っている。

1 調査の目的

幼児、児童及び生徒（以下「児童等」という）の発育及び健康状態を明らかにすることを目的とする。

学校保健安全法施行規則により4月1日から6月30日に実施される健康診断の結果に基づき、健康状態調査を実施する。

2 調査の対象

本調査の対象者は、文部科学省の学校保健統計に準ずるものとする。

（発育状態調査）

平成30年度学校保健統計調査（文部科学省）岐阜県調査実施校の抽出調査結果

（健康状態調査）

岐阜県公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校及び幼稚園に在籍する満5歳から17歳までの児童等在学者全員を対象

校種	学校総数	在学者数	参加校数	対象者数
	(校)	(人)	(校)	(人)
幼稚園(5歳)	72	4,188	59	1,683
小学校	370	106,881	370	105,049
中学校	180	54,308	179	54,185
高等学校	66	43,903	65	42,822
総数	688	209,280	673	203,739

※義務教育学校は、前期課程は小学校、後期課程は中学校のデータに含む。（以下 同）

3 調査項目

本調査の項目は、文部科学省の学校保健統計調査項目に準ずるものとする。本県独自の項目として「食物アレルギー」「1型糖尿病」「2型糖尿病」「腎性糖尿」「学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）の活用者数」を追加している。

4 結果と考察

(1) 発育状態

○身長・体重とも全国平均を下回る傾向

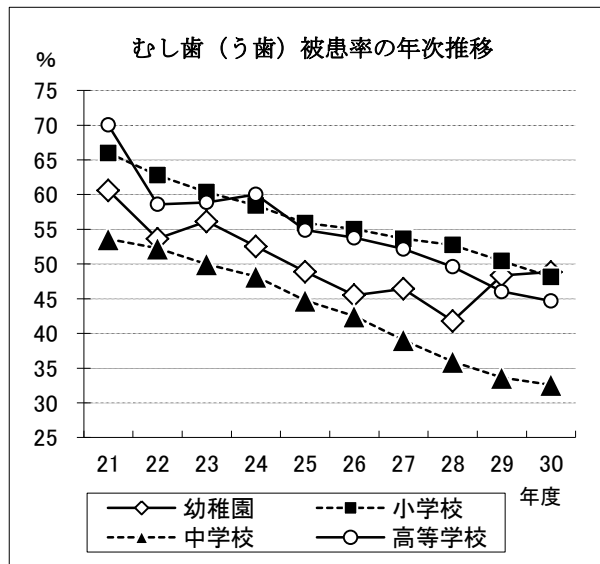
平成30年度の児童等の身長・体重について、身長は男子が6、16、17歳で、女子が8、15、16歳で全国平均を上回ったが、それ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。体重は男子が6、16、17歳、女子が8歳で全国平均を上回ったが、それ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。

（学校保健統計調査速報 岐阜県HPより）

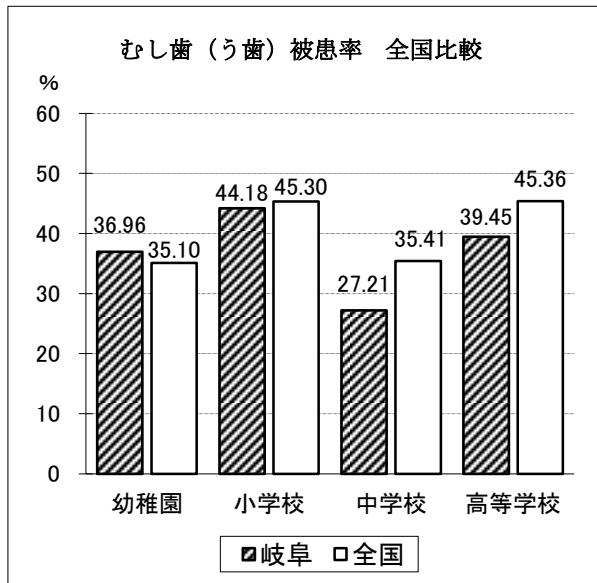
(2) むし歯（う歯）

○むし歯は更に減少傾向

むし歯被患率は、幼稚園36.96%、小学校44.18%、中学校で27.21%、高等学校39.45%となり、全ての校種で昨年度よりやや減少した。

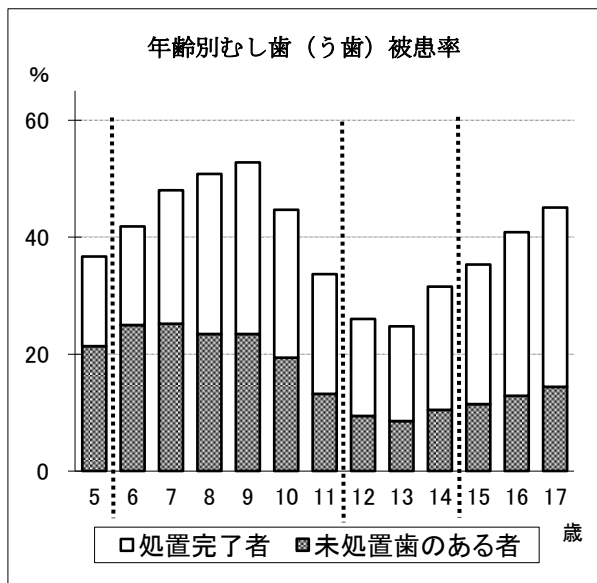


むし歯被患率を全国と比較すると、小学校、中学校、高等学校において下回った。特に中学校で8.2ポイント低い結果であった。なお、幼稚園が、昨年度と同様に全国より上回った。



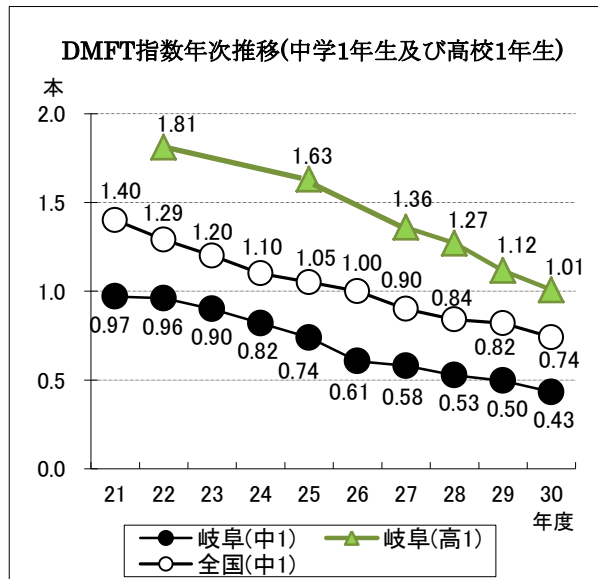
むし歯被患者の内、未処置歯のある者は、5～9歳に多く、その後は減少するが、14歳から僅かに増加しつつある。

むし歯被患率が10～12歳において割合が減少するのは、乳歯が生え替わることによると考えられるため、14歳以降の永久歯のむし歯を増加させないよう、幼少期からの生活習慣及び教育が重要である。



DMFT 指数（一人当たりの永久歯のむし歯等数）
 D：永久歯のむし歯で未処置の歯
 M：永久歯のむし歯が原因で失った歯
 F：永久歯のむし歯で処置を完了した歯

中学1年生（12歳）のDMFT指数は、昨年度の0.50本から0.43本に減少している。そして、高等学校1年生（15歳）も同様に、昨年度の1.12本から1.01本に減少している。

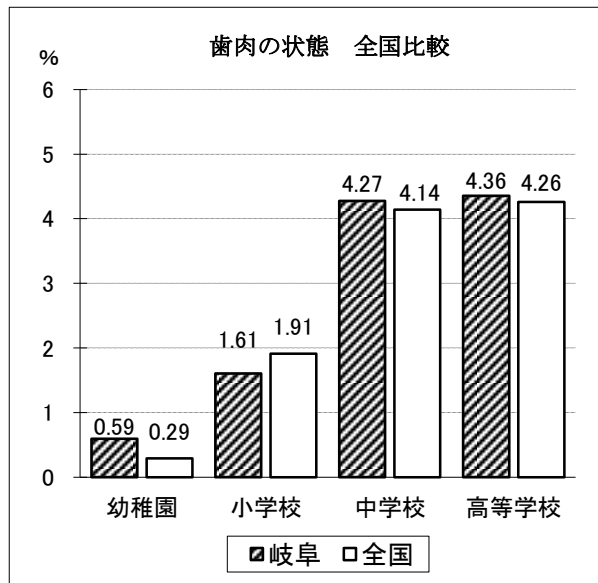


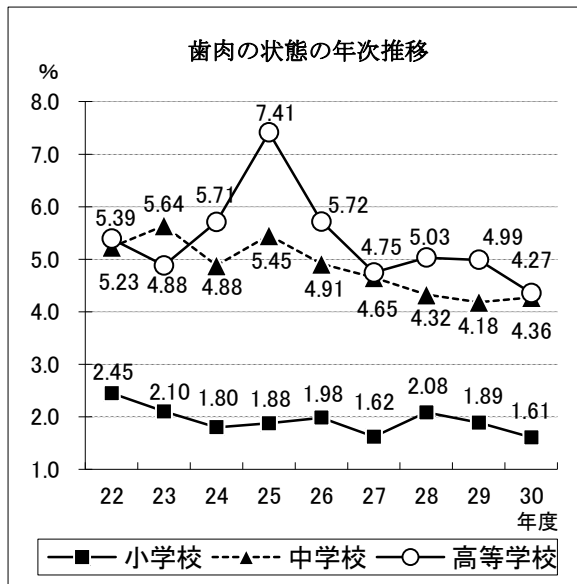
(3) 歯肉の状態

○歯肉の状態が小学校で下回る

歯肉の状態：歯肉に炎症があり、歯肉の状態が「2」（専門医による診断が必要）と判定された者

歯肉炎の生徒の割合は、全国平均と比較すると小学校において下回る結果となった。



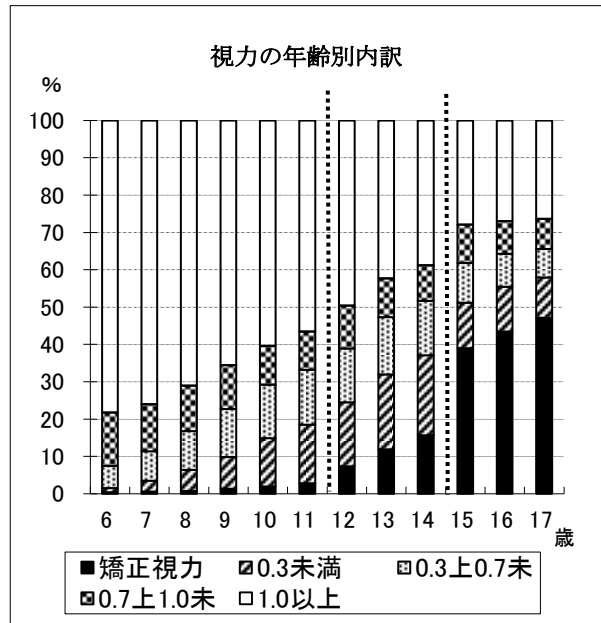


歯肉の状態の年次推移は、平成28年度以降、小学校、高等学校において減少傾向が続いている。「歯肉の状態」の「1」は、G0と診断され、「歯肉に軽度の炎症症候が認められているが、歯石沈着は認められず、注意深いブラッシングを行うことによって炎症症候が消退するような歯肉の保有者をいう」と定義される。定期健康診断の歯科検診では、学校歯科医と連携し、比較的軽度の歯肉炎であっても予防のため「2」（要受診）と判定している学校も多いことが被患率を上げている要因の一つではある。この結果を生かし、疾病ハイリスク・アプローチとして、G0、C0のある児童等への集団指導及び個別指導を実践している学校が増えつつある。

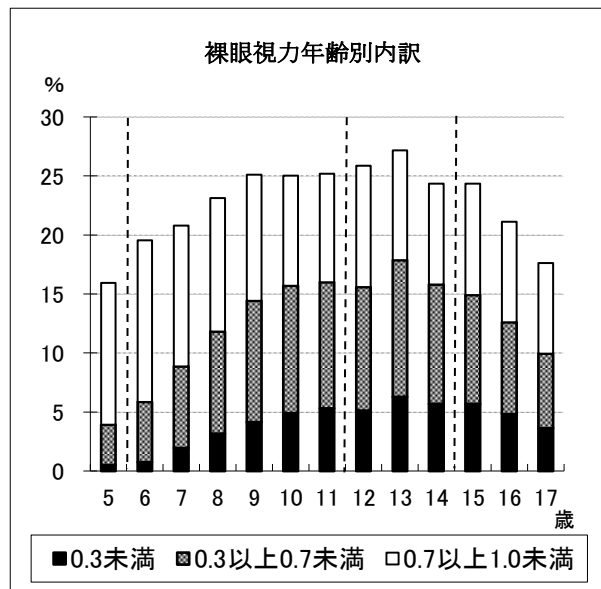
なお、C0とは「むし歯の初期病変の疑いがあり、口腔内環境が悪く、そのまま放置するとむし歯に移行する可能性が高く、また逆に口腔環境が改善されれば健全な歯面に変化する可能性のある状態の歯」と定義されており、歯肉炎と同様に積極的な指導を行っている学校、地域がある。

(4) 裸眼視力

近年、コンタクトレンズの使用などにより裸眼視力を測定していない者が増加しているため、平成27年度より「眼鏡やコンタクトレンズで視力矯正をしているため裸眼視力を測定できず、矯正視力のみ測定した者」の数も調査し、それを含めた視力の割合を算出した。裸眼視力1.0未満の者の割合は、年齢が進むにつれて着実に増加していることがわかる。



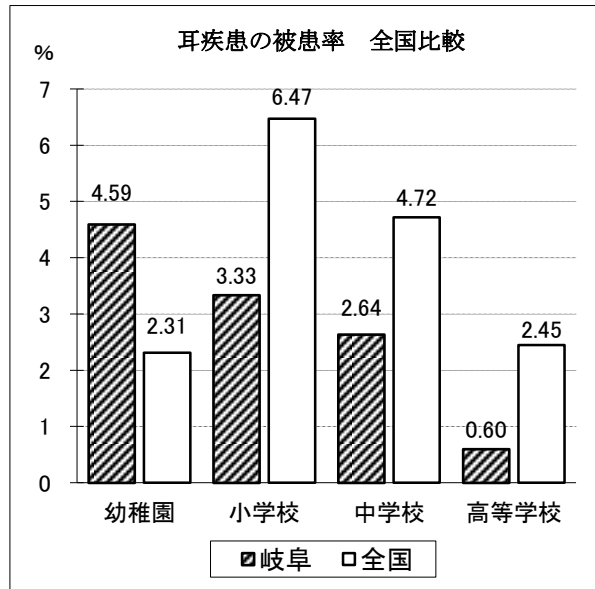
なお、裸眼視力年齢別では1.0未満の者が13歳で最も多かった。



(5) 耳疾患・鼻・副鼻腔疾患

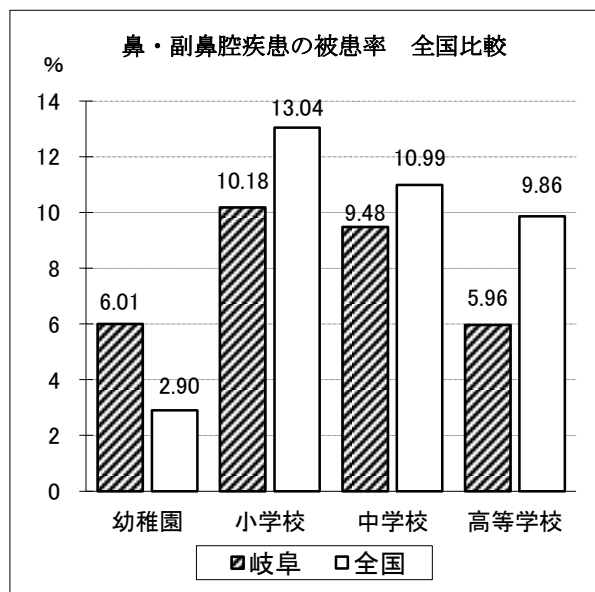
① 耳疾患・・・急性・慢性中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳垢栓塞等の疾患・異常と判定された者

耳疾患の被患率は、小学校、中学校、高等学校では全国平均を大きく下回った。一方で、幼稚園では昨年度と同様に上回った。



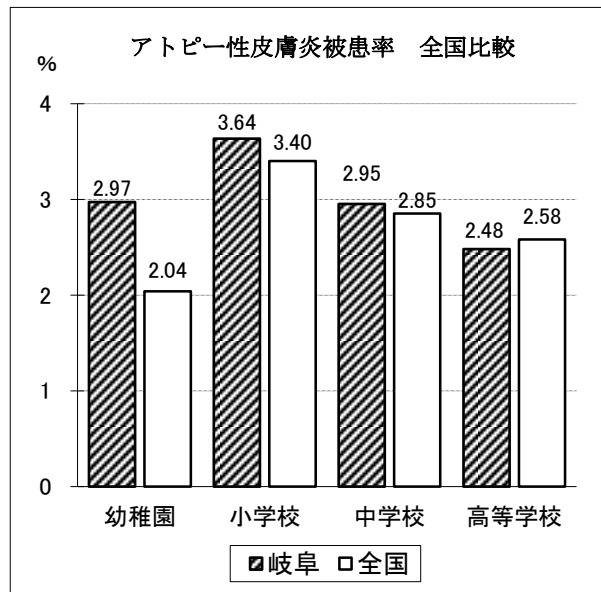
② 鼻・副鼻腔疾患・・・慢性副鼻腔炎、慢性鼻炎、鼻ポリープ、鼻中隔彎曲、アレルギー性鼻炎の疾患・異常と判定された者

鼻・副鼻腔疾患についても、小学校、中学校、高等学校では全国平均を下回った。一方で、幼稚園では昨年度と同様に上回った。

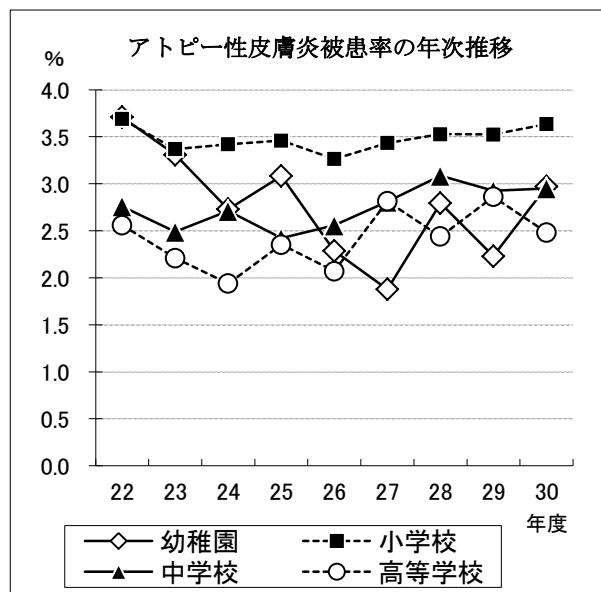


(6) アトピー性皮膚炎

全国と比較すると、幼稚園、小学校、中学校で被患率が高い。また、校種別では、小学校の被患率が一番高い。



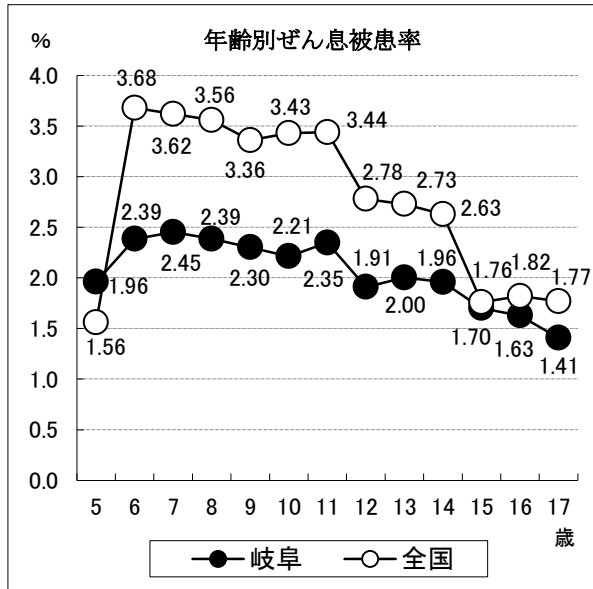
アトピー性皮膚炎被患率は、年度により増減はしているが、年推移としての増減変動があるとは考えにくい。



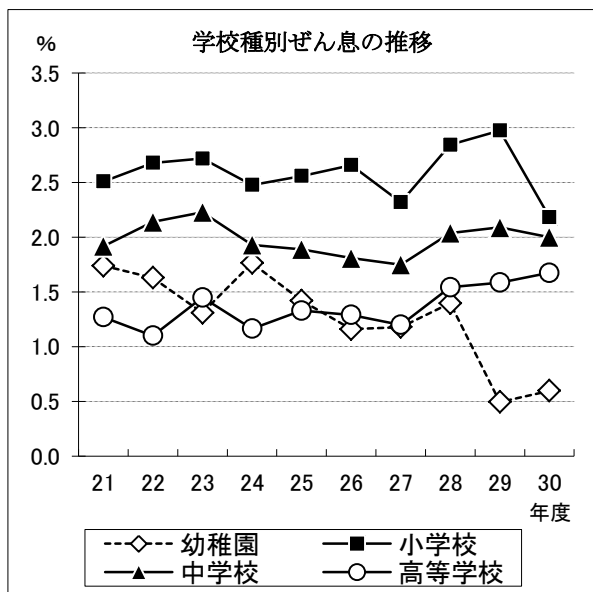
(7) ぜん息

○ぜん息被患率は全国平均より低い傾向

昭和42年度以降、岐阜県の年齢別ぜん息被患率は、全国平均に比べ、6歳児以降で低い傾向は続いている。



校種別のぜん息の推移は、小学校、中学校、高等学校で大きな変化が見られない。幼稚園については、平成26年度に大きく減少したが、平成28年度以降増加傾向である。

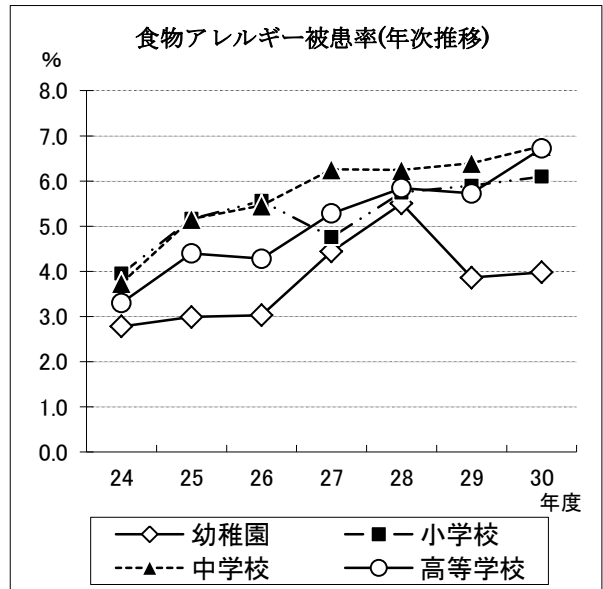


(8) 食物アレルギー

○食物アレルギー被患率は増加傾向

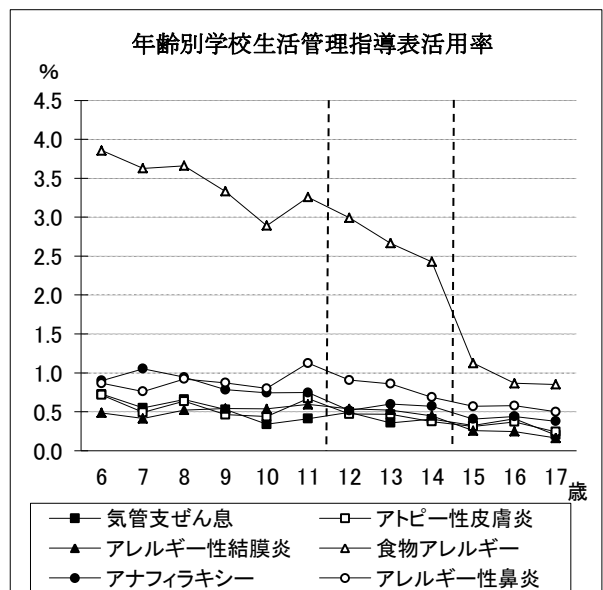
食物アレルギーの者：入学時、または健康診断前の保健調査等で食物アレルギーと確認された者

食物アレルギーを有する児童等の被患率は、全体的に増加傾向にある。



○学校生活管理指導表の活用は「食物アレルギー」が多い傾向

学校生活管理指導表の活用率は、「食物アレルギー」による活用率が、他のアレルギー疾患に比べて高い。また、年齢が上がるにつれ、活用率が下がっている。



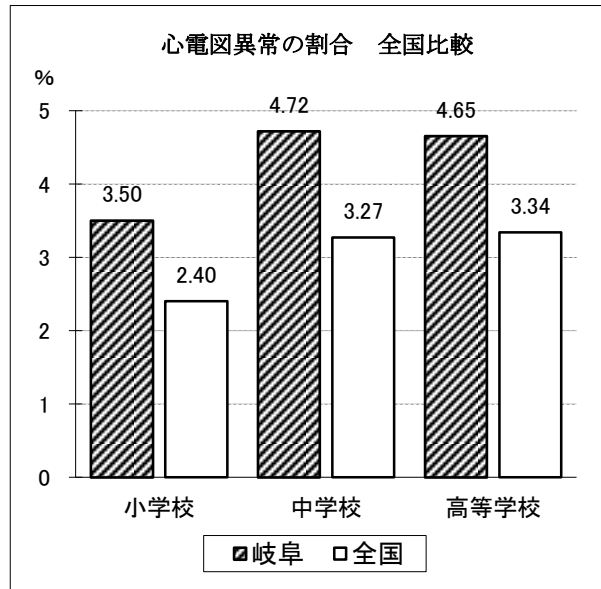
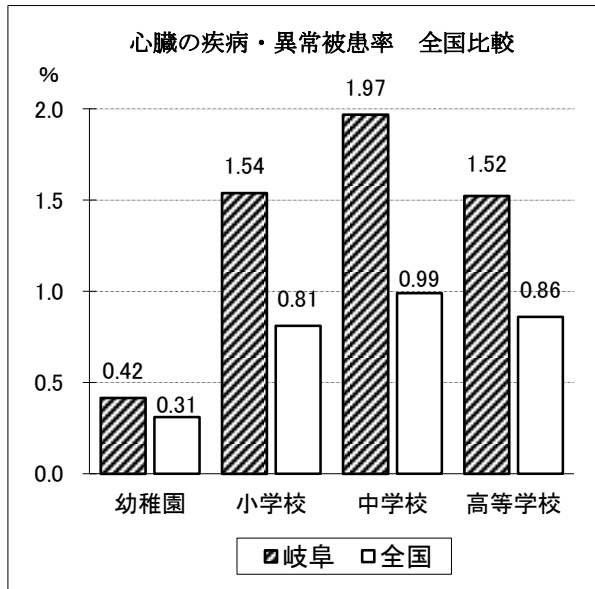
(9) 心臓疾患・心電図異常

①心臓疾患・・・心膜炎、心包炎、心内膜炎、弁膜症、狭心症、心臓肥大、その他の心臓の疾病・異常の者（心音不順、心雑音及び心電図異常のみの者は含まない。）

②心電図異常・・・心電図検査の結果、異常と判定された者。ここでいう異常とは医師が心電図所見を見て異常と判断した者を指す（一次検診）

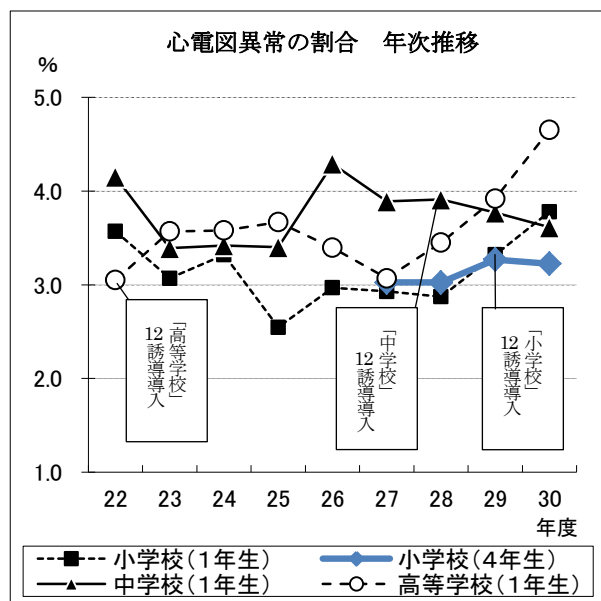
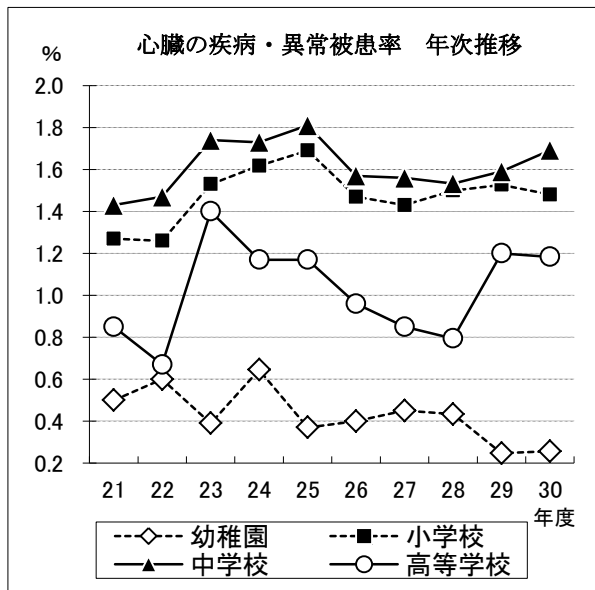
心臓の疾病・異常被患率の割合は、全国平均と比較して全校種で被患率が高値である。

心電図異常の割合は、全国と比較すると全ての校種でやや高値である。



心臓の疾病・異常被患率をみると、中学校、高等学校においては、年次推移の平均より高い数値を示した。校種別に比較すると、中学校の被患率が高い傾向にある。

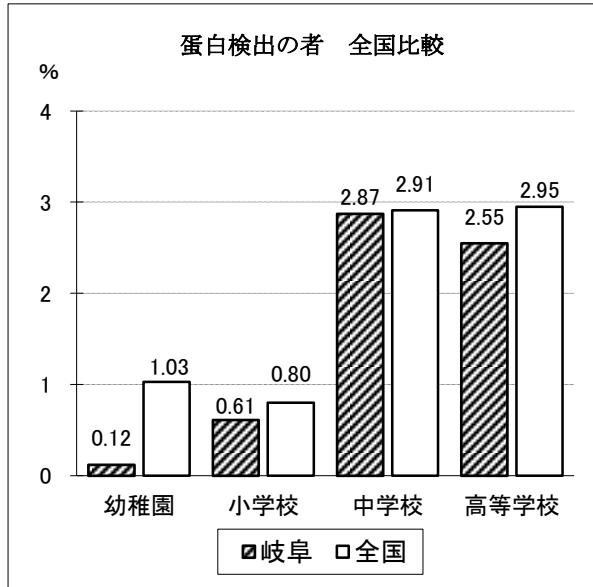
昨年度と比較すると、小学校4年生では、昨年度の3.27%から0.04ポイントの減少である。一方で小学校1年生では、昨年度の3.27%から0.46ポイント、中学校1年生では、昨年度の3.71%から1.01ポイント、高等学校では、昨年度の3.92%から0.73ポイントの増加である。



(10) 腎臓疾患

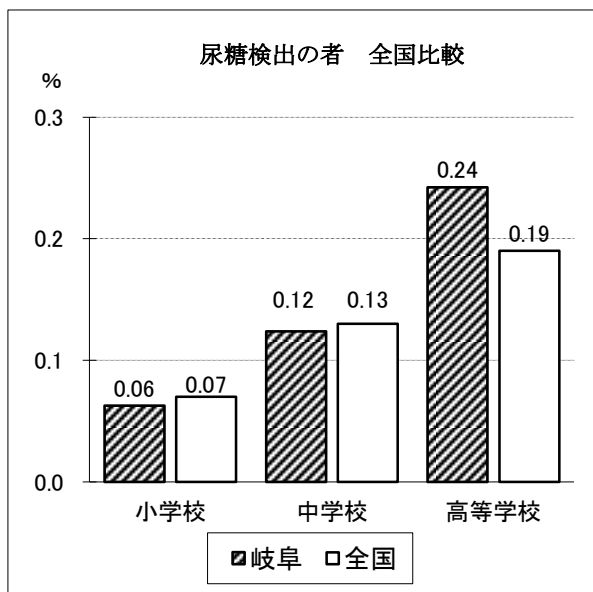
① 蛋白検出者・・・第一次検査の結果、尿中に蛋白が検出（陽性または疑陽性と判定）された者

蛋白検出の者の割合は、全国平均と比較して全校種において平均を下回っている。



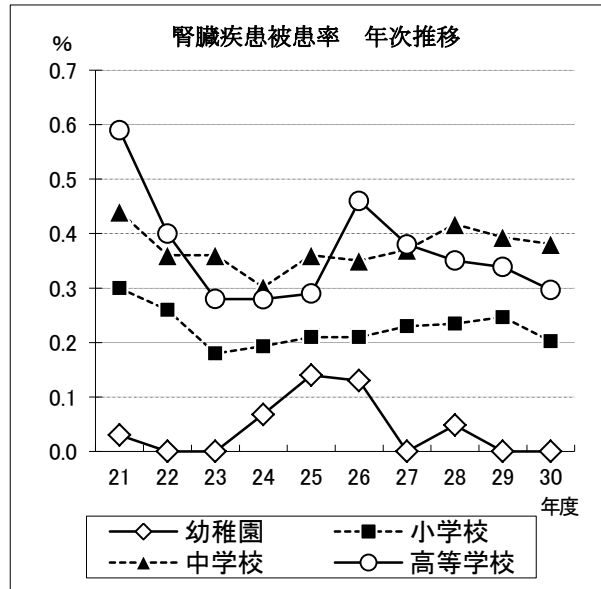
②尿糖検出者・・・第一次検査の結果、尿中に糖が検出（陽性と判定）された者

尿糖検出者の割合は、昨年度とほぼ同様の結果である。高等学校の尿糖検出者の割合は、平成27年度から全国より高値を示している。



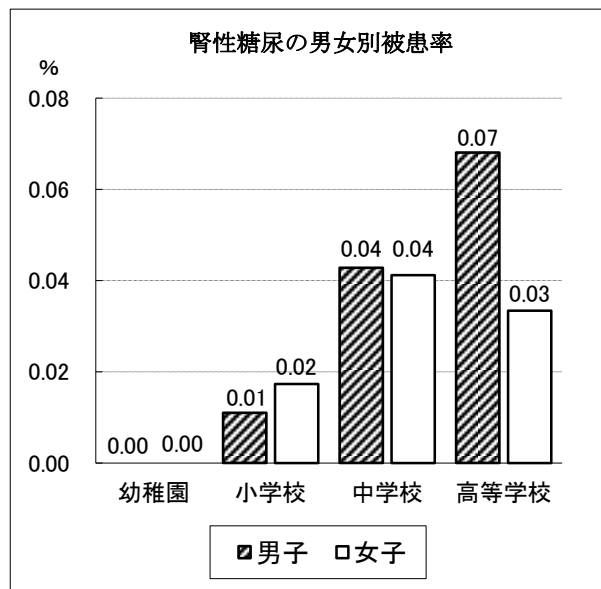
③腎臓疾患・・・急性及び慢性腎炎、ネフローゼと判定された者

腎臓疾患被患率においては、全校種において、昨年度より減少した。



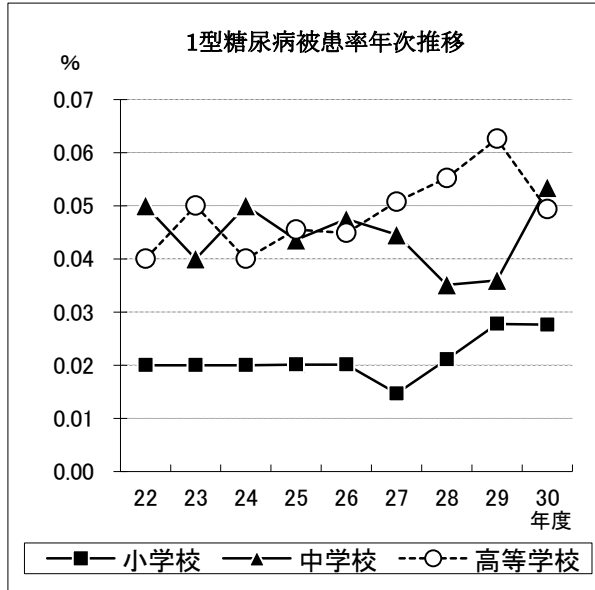
④腎性糖尿・・・腎性糖尿と判定された者

腎性糖尿の男女別被患率については、高等学校の男子がやや高いが、昨年度と比較すると、0.09%から0.02ポイント減少した。

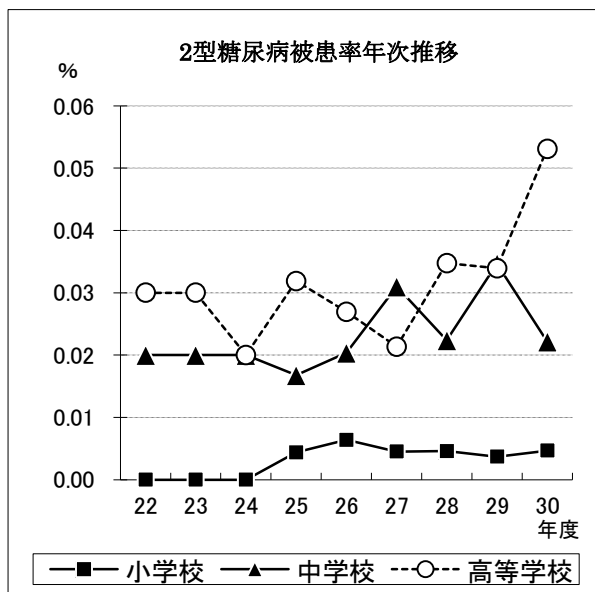


- ⑤ 1型糖尿病・・・膵臓のインスリンを生産している細胞が破壊され、インスリン分泌が著しく低下しておこる病気
- 2型糖尿病・・・2型糖尿病になりやすい素因を持っている子供が、運動不足、過剰な食事やストレスが多い生活を続けていると発症しやすい病気

岐阜県独自の調査項目である1型糖尿病の被患率年次推移を見ると、中学校においては昨年度より上回った。



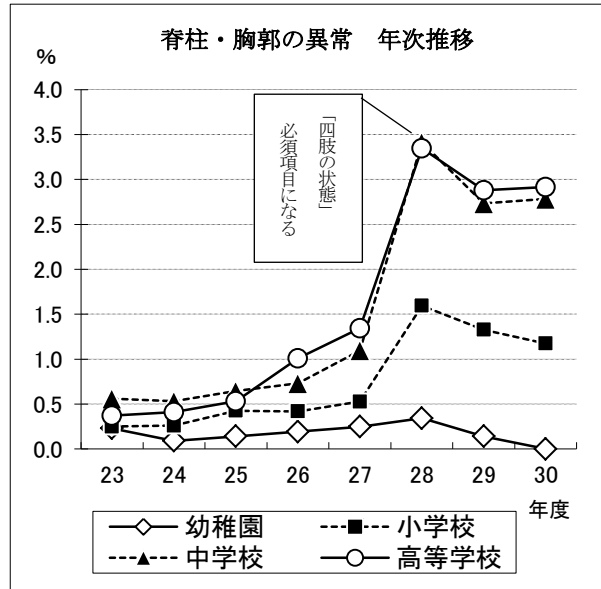
2型糖尿病の被患率年次推移は、小学校と高等学校において昨年度より上回った。校種別では、中学校、高等学校に比べ、小学校の被患率が低い。



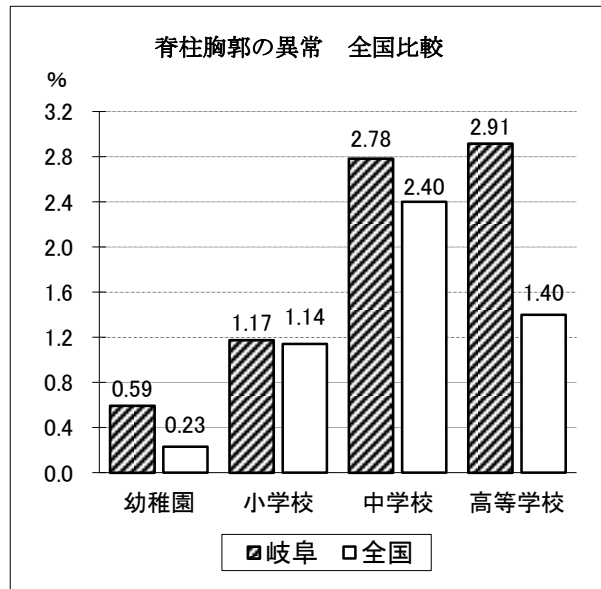
(11) 脊柱・胸郭・四肢の状態の異常

脊柱・胸郭・・・脊柱、胸郭及び四肢の状態が異常と判定された者

平成28年度より健康診断の項目「四肢の状態」が必須項目に加わり、運動器検診が実施されている。今年度は、昨年度から大きな変動はみられない

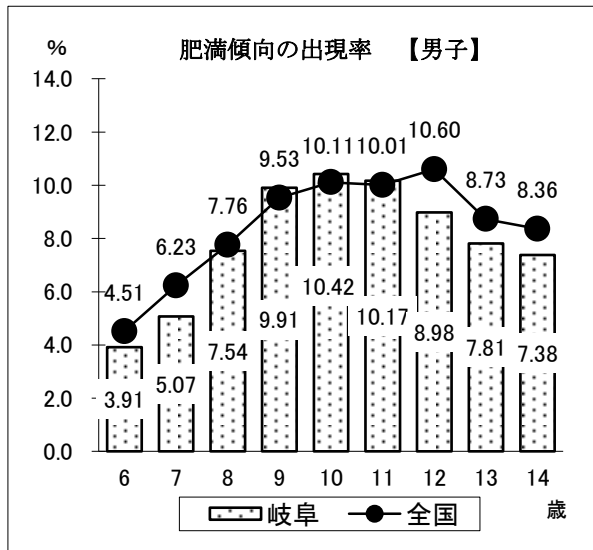


全国比では、全校種で高値を示している。



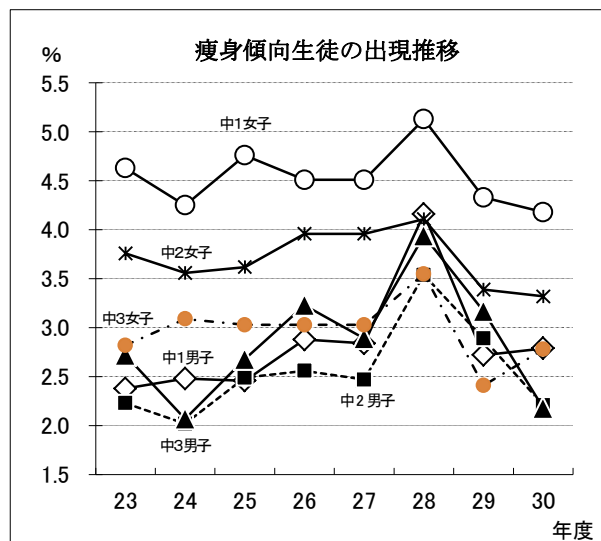
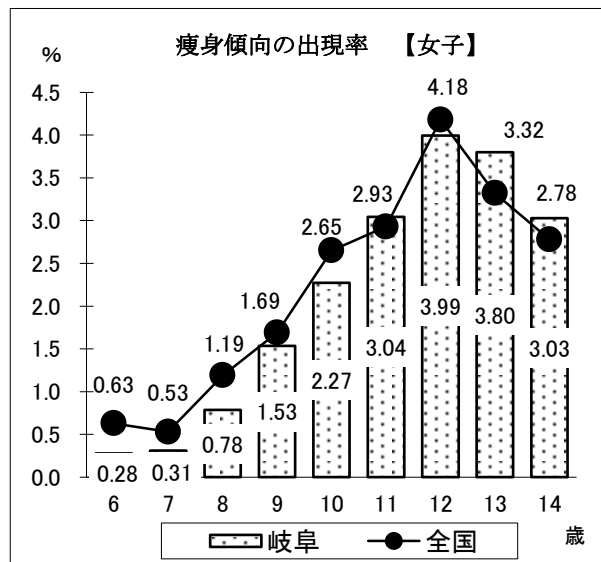
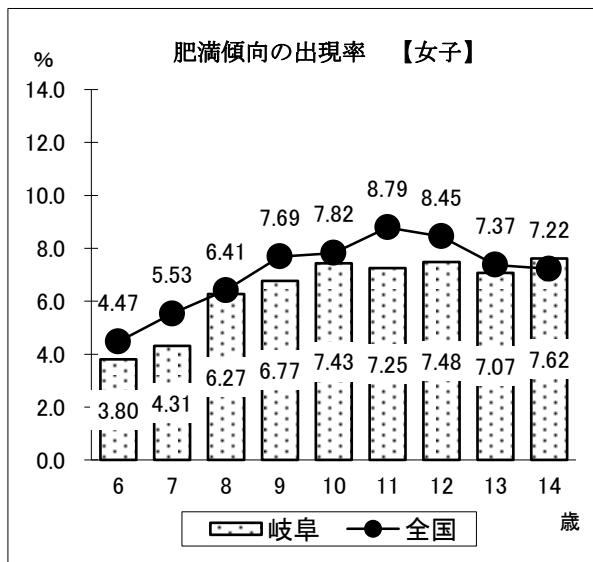
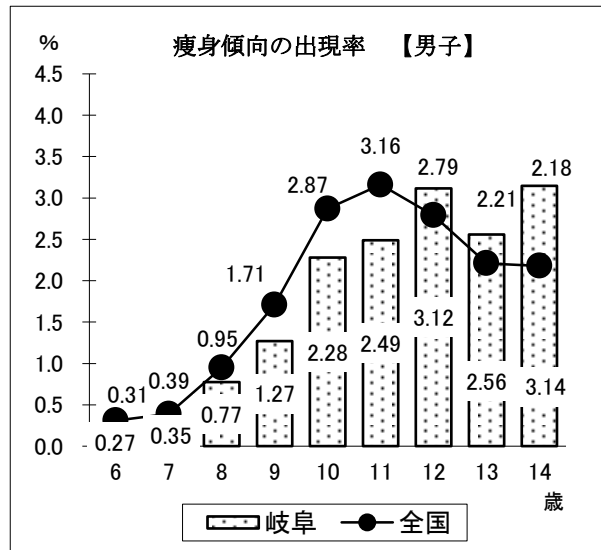
(12) 肥満傾向

肥満傾向の出現率は、男子は9～11歳を除くその他の年齢で全国平均を下回っている。女子は14歳を除くその他の年齢で全国平均を下回った。



(13) 痩身傾向

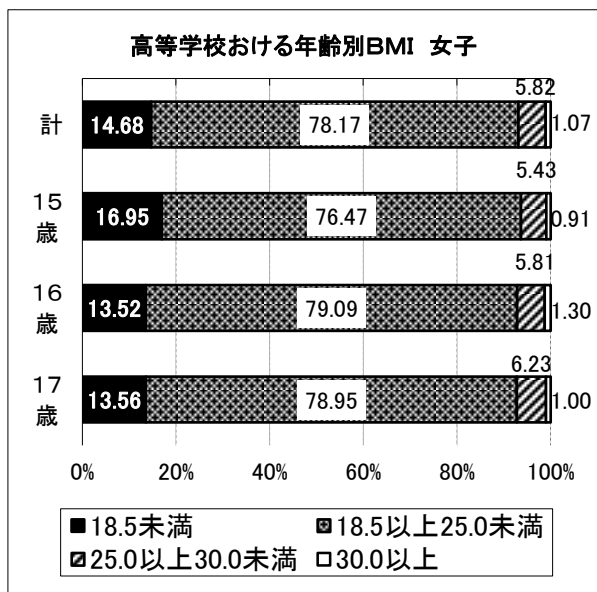
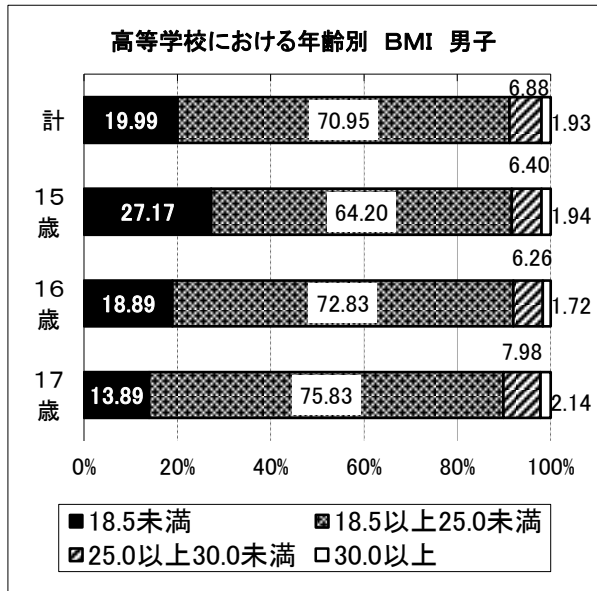
痩身傾向の出現率は、男子は12～14歳で全国を上回っている。女子は11歳、13歳、14歳で全国平均を上回った。



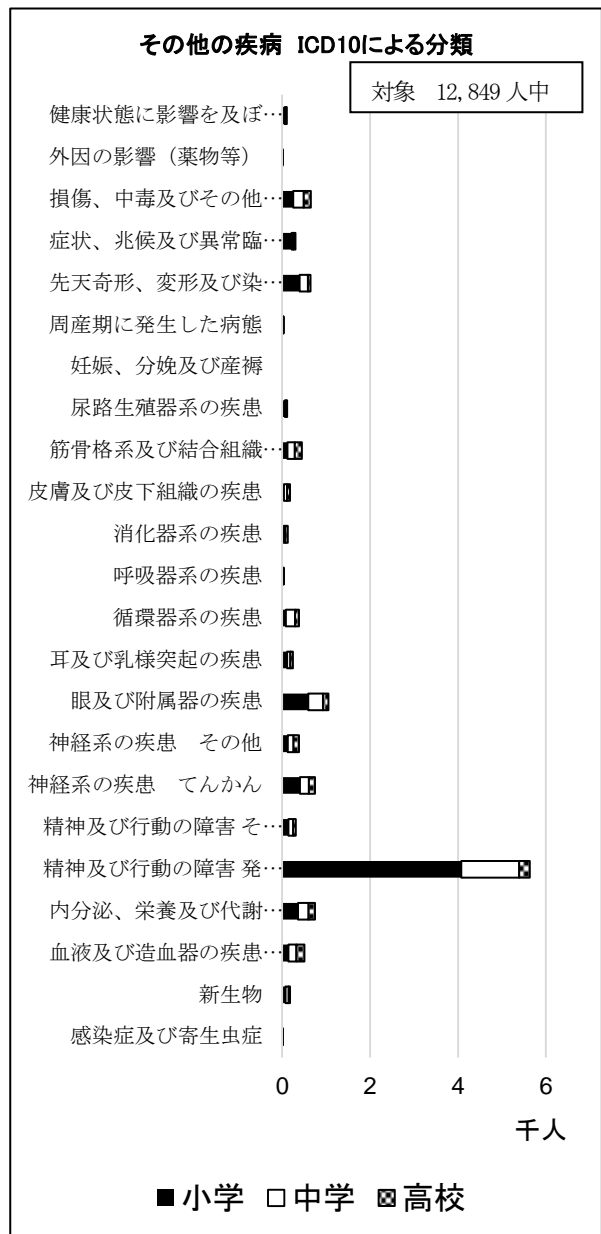
(14) 高等学校のBMI

BMI・・・成人の肥満並びに痩せの評価方法のひとつ
 $\text{体重} \text{ kg} / (\text{身長} \text{ m})^2$

高校生に対して、BMIを指標として肥満及び痩身傾向を算出している。男女ともに、BMI 18.5未満の割合が15歳に高い傾向がある。



また、最も多い疾病・異常は、発達障がい（自閉症スペクトラム障がい等）である。次に多い疾病・異常は、昨年度は内分泌・栄養及び代謝疾患（低身長、成長ホルモン分泌不全症等）であったが、今年度は、眼及び付属器の疾病・異常の割合であった。小学校で、4.60%、中学校2.63%、高等学校0.98%であった。



(15) その他

県内の「その他の疾病・異常」の被患率が増加傾向にあることから、平成25年度よりその他の疾病調査を行っている。

「その他の疾病・異常」中で各校種が占める割合は、小学校57.04% (H28:57.16%)、中学校28.87% (H28:37.17%)、高等学校14.09% (H28:14.11%)である。